

2021年度
地球環境『自然学』講座
第13回

テーマ

神奈川県小田原の森里川海

講 師

鈴廣かまぼこ株式会社

社長 鈴木 博晶 先生

2021年10月30日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

鈴木 博晶（すずき ひろあき）



1. 経歴

昭和 29 年 2 月小田原生まれ
昭和 52 年東京工業大学経営工学科卒
昭和 53 年鈴廣かまぼこ(株)入社
平成 25 年～令和元年全国蒲鉾連合会会長

2. 現職

鈴廣かまぼこ(株)代表取締役社長

3. その他

湘南ベルマーレ評議員
さがみ信用金庫理事

小田原には、森海川連環の自然があった

小田原は、神奈川県西部に位置し、相模湾に面し、北部の箱根連山、丹沢連山に抱えられ、足柄平野には酒匂川が流れ、地下水が豊かです。

2010年9月、山北に大雨が降り多くの樹木が根こそぎ抜けて海まで流されました。河口の橋脚に引っかかった木は森の異変を知らせています。

間伐などの手入れをしないと下草が枯れ、土が雨で流され根が浮いてしまい、終いには倒れてしまうのです。神奈川県西部の多くの森に危機が迫っています。

枝打ちや間伐などの手入れをして、更には広葉樹を加えていく森の再生活動のスピードをもっと上げていくことが求められています。

2010年9月の大雨の影響はしばらく続き、酒匂川の河口は泥水が広がりました。砂の海底には泥が堆積してヒラメや伊勢エビが棲めなくなるなど環境への影響が心配されています。

昭和30年代まで、小田原はブリの大漁が続いていました。昭和20年後半から30年前半では、定置網に一度に1万尾2万尾も入ることがありました。ピーク時には、年間60万尾の水揚げがありましたが、現在は数百本に減っています。

ブリは真水が注ぎ込む餌の豊富な汽水域を好んで海岸線に近づき、定置網に入るのです。

御幸ヶ浜は、夏ともなるとその広い砂浜には歓声が広がり、多くの市民の憩いの場となりました。

御幸ヶ浜は、砂の供給が弱まり、石ころだらけの浜になってしまいました。

海岸線変化写真

御幸ヶ浜は200m近い幅の砂浜で、昭和40年前半までは、その減少後退は起きていませんでした。昭和48年あたりから急速に砂浜の後退が起きてしまいました。ブリの漁獲も同じように減少しており、ダムや取水堰による真水と砂の供給減少や西湘バイパスとの因果関係が考えられています。

2007年、西湘バイパス二宮付近で、台風の高波により道路が崩壊しました。かつては豊かな砂浜が大波を自然に消してくれたのですが、今は構築物に頼るしかないのでしょうか。海岸線のほとんどが後退して、西湘バイパスに直接波が打ちつけるため、テトラポッドで護岸をし、コンクリートの要塞のようになっています。

かつての航空写真では、酒匂川、早川の河口に、扇状に大きな汽水帯がはっきり見えます。

川は、真水を運ぶだけでなく、砂も海に運びます。しかし、今は、ダムや取水堰によって、砂が河川に溜まり、河床をどんどん上げています。イコール河川断面が減少して、大雨を海に流しきるポテンシャルを失い、堤防を越えてしまう危険が増しています。

川は子供たちの絶好の遊び場で、様々な生き物と接する学びの場でもありました。

砂の流出を抑えようと突堤が建設され、ダムから浚渫された山砂を運び入れています、思うように砂浜は再生してくれません。

飯泉の取水堰からは、酒匂川の1／3にあたる水を汲み上げ横浜方面へ水道水として送っています。堰の上流には砂が貯まり川底が浅くなり増水時の危険が増し、遡上できなくなったハゼなどが姿を消しました。

美保ダムには山からの砂が貯まってしまい、絶えず浚渫をしています、運びきれない砂がダムの手前に積み上がっています。

山には不法投棄が後を絶ちません。

市の鳥コアジサシも希少種の小田原メダカにもしっかりした保護活動が求められます。

里山に休耕田が増えました。田に水を張らないとまちの地下水位が下がります。

なにができるのか

河川の清掃活動……

森林の保全活動……

子供たちの体験指導……

これからの世の中はどうなっていくのか

これからの世の中をどう想定していくか…人口動態、テクノロジー、地球環境

日本の人口は、2020 年をピークにドンドン減っていきます。

高齢化と労働人口の減少は勿論だが、世帯類の構成を見ると、絶対人口数以上に、社会への影響が大きいことに気づかなければならないと思います。

一人暮らし世帯が増え、その中でも高齢者の一人暮らし世帯が多い。

社会を動かすために、この人達をどう活かしていくのか、最大の課題ではないかと思っています。

テクノロジー(科学技術)は、Ai の進化によって、計り知れなく便利な社会になっていく一方で、

人の能力を AI が越えてしまうことで大きな分岐点が現れると言われている。

地球環境の回復保全にテクノロジーを活かしていくのは、あくまでも人間であろうが…

気候変動を抑えるために脱炭素社会を標榜する社会だが、国や大企業が取り組むべき課題に対して、個人や一企業が取り組めることは少なくないはず。

視点を变えることでやれることは身の回りに少なくないはず。(例示)